病理診断科臨床実習の総括

B 班　６月６～１０日

患者診療における病理診断の重要性をどのように理解したか。

- 病理診断は患者さんの死因を決定する最終診断である。臨床診断と病理診断の違いが生じることがある。死因の追究にはとても深く関わっている。
- 病理診断科は、全ての診療科に関わり、数年前まではわからなかった疾患の病態（癌の遺伝子変異や病型分類など）がわかってきたことで、今後より一層重要になる分野であることを理解した。
- 病理医がいなければ、外科手術をしても良性か悪性か、どのような組織型か断端陽性か陰性かなどの正確な診断ができず、手術後の治療方針も決められないので、病理診断は医療の中でとても重要な診断科だと思った。
- 臨床所見をみることも重要であるが、確定診断をする上では、病理所見が絶対に大切だと感じた。組織をみることで、その疾患の成り立ちなども理解することもでき、大変勉強になった。患者さんに説明する時にも病理所見を説明することも必要だと思った。
- 現在の日本における悪性腫瘍の治療の重要性は高まりつつあり、その Stage 分類を決定する上で欠かすことのできない病理診断は患者の QOL を大きく左右するものであるだけでなく、その分類の研究によって患者の治療の適応について改善し得るということを理解し、直接的に患者に接する機会は少ないものの、患者の人生と密着した存在なのだと感じられた。
- CPC を行う中で、先に臨床結果からの診断を出そうと思いましたが、病理の結果がないと情報が少ない上に診断の根拠となるものがあまりに少なくなってしまいました。病理診断は疾患を考える上でとても大きな役割を果たしていることを実感しました。
- 診断の分岐点にいる患者さんに、確定診断を伝え、今後の治療方針を決定する重要から責任重大な診断だと理解した。
- 確定診断を行う上で必要不可欠でかつ治療方針を決定する上でも重要なものだと思った。また、患者さんに説明する際も機序をわかりやすくするために必要だと感じた。

病理診断科臨床実習の感想

- 正常組織を学ぶにはとても良かった。CPC 実習に参加することによって、確定診断をする上で、病理所見はとても大切だと感じた。楽しかった。
- 死亡に至った病歴を考えたことで、死亡に至る前に何をするべきだったかを考えることが、将来何科に進むとしても大切なことだと理解できた。
  治療方針決定に必要な病理診断を直に見学できてよかった。
  医大内での手術中の術中迅速診断も見学してみたかった。
- CPC 実習で病理所見や病態について勉強することができてとてもためになった。もっと病態生理の勉強が必要だと思った。
- 病理診断学講座で 1 週間勉強させて頂き、少し病理の雰囲気が分かったのでよかったです。
  CPC(clinico pathological conference)を体験してみて、臨床症状や検査値だけでは診断に確実性をもたせるのは難しく、病理のマクロ像、ミクロ像を見ることで初めて色々なことを考え、初めに作製したフローチャートを考え直すことができました。思ったよりも最初のフローチャートと病理を見た後のフローチャートが異なっていて病理へ重要性を痛感しました。
  お忙しい中、講義や実習をして下さった先生方、ありがとうございました。
- プレパラートを入れ換えながら全身臓器を手早く検索し、病態を理解する作業は純粋に楽しかった。自分の不勉強から深い思考ができなかったが、病理学の楽しさをよく理解できた。
- 正常をまずあまり理解していなかったことがわかりました。なので病変かどうかを考えるのがとても大変でした。いつも問題を解く時や教科書の病理像を見る時は、これが疾患だとわかっていますが、正常の可能性がある中での診断の方が大変であることがわかりました。実際の現場ではそれが当たり前なので、正常をしっかり理解しないといけないなと思いました。
- 病理診断を行う上で、スライドの向こうをとおして見える患者さんを思いやるという菅井先生の言葉が心に響いた。患者さんに診断を納得していただく上で、重要となる病理診断について今後しっかり学んでいきたい。
- 勉強不足を痛感した 1 週間でした。病理医は医療のスペシャリストというのは本当だと思いました。先生方がとても輝いて見え、いつか自分もどこかの分野のスペシャリストになりたいと思いました。